
背を這う蟲

yoshina

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

背を這う蟲

【Nコード】

N3559B

【作者名】

yoshina

【あらすじ】

前出の「こどもたち」「夢をみる少年」に新作を数本加えた、「人間」としての新一たちを描く一話完結型小説。万人受けはしないであろう負のオーラ満載。1話目以外は全て原作から2年後の設定になっています。オリジナルとしてもいけないことはないかもしれません。

一、白の妙

一歳になったばかりの子供が自分の目の高さにある本を力の限り引つ張って一冊一冊取り出していく。

分厚く小難しそうなタイトルのついた本は子供にとってはおもちゃではない。

数冊取り出し満足した後、それらを今度は積み上げていった。

その行動に何の意味があるのかわからないが、子供にしかわからない面白みがあるのだろう。

きやつきやつと声を上げて積み上げては倒し、積み上げては倒しを繰り返す。

吹き抜けの円筒状に設計された大きな書斎。

子供はそこにいた。

ぐるりと一周する本棚は高く天井まで届いておりまさに圧巻である。

そんな一風変わった洋館の「仕事場」で親の優作はソファにくつろぎながら

新聞をぺらりとめくった。

若き推理小説家は毎日数部の新聞を読む。

同じ出来事でも新聞によって書き方が違うのが興味深いのだ。

ちなみに今日の話題は政治家の不祥事、隣県での殺人事件、親子を乗せた車の事故。

あまり歓迎できるものではない内容が薄っぺらい紙に踊っている。

「明るい出来事というのはあまり目に付かないが、

暗いのはよく目に付いてしまうものだね」

「そうねえ。暗いことより明るいことのほうがもしかしたら当たり前じゃなくなってるかもしれないのに」

記事を見たまま同意を求めると、背後でコーヒーを作っている妻の有希子が

同じくコーヒーメーカーを見たまま答えた。

世界的女優だった彼女の立ち姿は後ろだけでも美しく、ぴんと本糸が通っているかのように綺麗な姿勢である。

「そういえば、最近あなたの作品は前よりも暗くないような気がするわ。」

「一作品で亡くなる被害者の数が少なくなったせいかしら」

夫の作品を世界で一番早く読むことが出来る彼女は、今度は振り向いて問いかける。

事実、優作の最近の推理小説は殺害される人数が減った。

以前は多い時で百人近く殺す犯人もいたが、次回作で死ぬのは冒頭の一人だけ。

有希子が作品に意見することは滅多にない。

だからその変化に気付いても言うことはなかったが今は話ついでに聞いてみることにした。

一方の優作は新聞を目の前のガラステーブルに置いて

考える仕草をする。

「やっぱりあまり人が死なないと盛り上がりには欠けるかな」

「そんなことないと思うわ。少なくなった分スケールは小さくなるかも」

「しれないけれど緊迫さは増したような気がするもの」

「そうか。君がそう言ってくれると安心するよ」

数十件の殺人と数件の殺人。

迫力は前者のほうが確かにある。

しかし後者の方が一つの殺人における描写は格段に丁寧だ。被害者一人一人に焦点が当てられ、奥行きが増している。

優作の書く小説にそのような変化が現われ始めたのは本当にごく最近。

この1年ほどだ。

それが示すものといえば一つしかない。

「新ちゃんの影響かしら？」

新一が生まれてから彼の小説に対する意識が、変わった。

「そうかもしれないね。俺にもどうやら人並みの情はあったらしい」

「あら、あなたはとても情が深い人よ。だってこの私が一生側にいて楽しそうって思ってたんだから」

「はは、まあ君に対してはそうだろうね。でも他人に対してはそこまで」

感情的になることは今まで無かったよ。それが新一が生まれてからどうも変わってきたみたいなんだ」

「・・・あなたがこの1年でだいぶ丸くなったことはわかるけど」

それだけじゃないみたいね、と言いながら有希子は淹れたてのコーヒーを

テーブルに置いた。

湯気と共に芳しい香が鼻につく。

カップに手を付けようとしたが熱かったのでまだ止めておいた。

「俺のそういう変化を読み取れるのは君ぐらいだろうなあ。

……自分の書く小説が他人事じゃないかもしれないって思うようになったんだよ」

「他人事？」

「俺が生み出した加害者や被害者のような不幸がいつ身近に起こるかわからないってことさ」

あくまでも優作の書く推理小説はフィクションである。

しかしいつかそのフィクションがノンフィクションに変わらないとは断言できない。

もし、その小説で死んだ女性が有希子だったら？

もし、死んだ女性が遺した子供が新一だったら？

そう思うとなんだか小説で人を殺すのがとてつもなく大変なことに思えてきたのである。

「君が新一を産んでいるのを側で見ていた時に実感したんだ。人一人が生まれることがどれだけ大変かっていうことが」

だからフィクションとは言え、あっさり人が死ぬのは躊躇われた。逆に一つ一つの事件を丁寧に書こうと思った。

人が生まれることと同じくらい人が死ぬことを大事に扱ったために。

そんな夫の本心を初めて聞いた有希子は少しだけ呆けたような顔をしたが、

次にふつと笑った。

「そう。なんだか私今とっても嬉しいわ。私と新ちゃんがあなたに影響を与えたなんて信じられないもの」

「そうかい？いつも君の独創的な行動には驚かされているけど」

「もう、優ちゃんったら！・・・じゃあつい先日あなたが途中まで書きかけて

没にしたっていう小説ももしかしたらそれに関係あるのかしら？」

頬をぷう、と膨らませた後、今度ははつとした表情になる。

くるくると変わる女優の美しい顔を眺めながら、

「そうかもしれないね」

彼は苦笑した。

そして側でただひたすら本をいじっている息子の頭をぽんぽんと叩く。

不思議そうに息子の新一は父を見上げた。

ぱちくりと大きな目を瞬く。

お蔵入りにした小説は実は最後まで出来ていた。

しかしそれを優作は世間に公表する気にはなれなかった。

没の小説で殺される人数は女性1人。

妊婦である。

なので腹の中に居た子もあわせれば2人死んだことになるかもしれないが、

書いている途中でその設定が嫌になってきたのだ。

こういつことはあってはならない、と。

小説家としては失格だろう。

それでも彼は父親としての感情を選び、その小説を封印することにした。

「こどもってすごいわよねえ。どんなことにも動じないあの工藤優作の

価値観を変えてしまうんだもの」

彼の隣にカップを持って有希子が座り、2人のコーヒーにスプーンを入れてかき回した。

砂糖を混ぜるためだ。

あわせてテーブルに元から置いてあったミルクを優作が垂らす。

黒い世界に白い線が綺麗な渦を描いた。

くるくると白は廻り、やがて黒の中に消えていく。

それをぼんやりと眺めながら彼は言った。

「事実小説よりも奇なり、というしね」

仲睦まじい優作と有希子の側で、新一が本の上に乗っかって
楽しそうに笑っていた。

二、こどもたち（前書き）

同題名の前作に少し付け足しをしています。

「、こどもたち

真っ赤な死体を見つめる青年に躊躇いながらも聞いた。

「こういう事件には、前にも遭ったのかい？」

と。

青年は顔色を変えず答える。

「いいえ」

こどもなりにげにそう言った。

はあー、と重いため息をつきながら高木は助手席の窓の外を見た。
車から見える夜の町は大雨で歪んで見える。
今日は一日中雨だった。

「何よ、高木君。そんなため息ついちゃって。事件はすぐ解決でき
たんだし、
もつと元気出さなきゃ。事情聴取もさっさと終わらせて早くあなたは休まないと」

隣でハンドルを握る佐藤はこの天気のような負のオーラを出す高木
に苦笑する。

ここ一週間仕事が重なってろくに寝ていない彼に、彼女が
現場から警視庁に戻る自分の車に乗るよう誘ったのだった。
この状態で彼が運転すればいつ電柱にぶつかるかわかってものでは
ない。

「いや疲れてるのはもう慣れてるんでいいんですけど・・・そうじやなくて

今回の事件はちょっとなあ、と」

「ああ・・・そっちのことね。大丈夫なの？ちゃんとそれで休める？」

心配そうに横目でちらりとこちらを伺う。

その目に込められた感情は後輩に対するものだったのか、恋人に対するものだったのか。

どちらにしても、彼女が彼をとっても大切に思っていることには違いない。

「僕は大丈夫ですよ。ただちょっと彼のことが気になって」

人の良い顔で高木は彼女に向かって笑いかけた後、複雑な顔つきになって前に向き直る。

そんな表情にさせた原因の「彼」とは偶然事件現場に居合わせてしまった

顔なじみの青年のこと。

今年で彼は大学生になっていた。しかしただの大学生ではない。

「工藤君がどうかしたの？」

「今日の現場、普通に見てたんですよね。彼」

学生でもあり、全国にその名を轟かせる若き探偵は目の前に起こった殺人事件を鮮やかに解決して見せた。

そう、いつものように。

「犯人はあなたです」と男に向かって指差して。指の先にいた犯人はにやりと右の口角を上げて嫌な笑みを浮かべていた。

「ああいう死体は初めてだったそうですよ」

「…嘘でしょ。だってあんなに普通に…」

「だから気になってるんです」

” ああいう死体 ”

今日起こった殺人事件はホテルの一室で行われていた。被害者は20代後半の女性。

と、もう一人。そう言ってもおかしくはない。

女性は臨月の妊婦だった。

ナイフと思われる凶器で腹を裂かれ本来出てくるはずのなかった所から

赤子が引きずり出されていた。

部屋は「2人」の血で真っ赤に染め上げられ、白い壁や天井がその色を奪われていた。

その惨劇に、第一発見者のホテルマンは半ば正気を失っていたようだ。

PTSDの疑いもあった。

そのホテルマンもまた被害者と呼べるかもしれない。

「初めてあのような・・・なんていうか、人間としての何かを無くしてしまった死体を

間近に見て、彼は本当になんとも思わなかったのかなあ・・・と」

ホテルの一階のレストランで昼食をガールフレンドと取っていた彼は

事件の騒ぎを聞きつけ、警察が来るよりも早く事件現場を見たのである。

そして混乱している従業員に的確に指示を出し、現場を荒らさぬよう手配をしたのだった。

警察が到着した時彼はいつものような態度、仕草で死体を検分していた。

「お待ちしておりました、目暮警部」

高木刑事と佐藤刑事もお久しぶりです。

そう笑顔すら浮かべて会釈して見せた。
その笑顔は惨劇の場にはそぐわなかった。

「もう随分前のことになっちゃうけど、私が今回みたいな猟奇的殺人を初めて見たときは
もうどうにもならなくなっちゃったわね。落ち着こうと思っても、
体や心が言う事を
聞かなくて目暮警部には散々叱咤された記憶があるわ」

こっそりトイレで吐いたこともあった。
食事なんか一ヶ月くらいまともに食べられなかった。

「それは僕ですよ。佐藤さんも覚えてると思いますけど……」

佐藤と同じく高木も食事が喉を通らなかった。

心配して彼女がくれたカロリーメイトすらあまり食べられなかった。

「そういえばそうだったわねえ。でもいつのまにか慣れてしまったのよね、私達」

どれだけ吐こうが苦しもうが死体を見る回数を重ねることに何かが麻痺して

しまっているのだろう。

今回の事件も驚いたし哀れに思ったが、下からこみ上げるような気持ち悪さはなかった。

淡々と仕事をこなしていくのみ。

早期解決と最小の被害に留めることが自分達に与えられた仕事。

隣に居るこの誰よりも優しい彼でさえ、もう、死体を見てもうろたえないのだ。

両親を見ることなくその命を奪われた赤子を見ても手帳にその様子を書き写すだけ。

何か妙な寂しさと悲しさを佐藤は覚えた。

「でも工藤君は最初から取り乱すこともなかった。その上事件まですぐ解決させた。

・・・私達が手をこまねいている内にね。高木君はその辺が引つか

かるのかしら？」

「・・・はい。だって、彼はまだ子供なんです。多分僕が彼より勝っているのは

死体を見る回数だけだと思います。頭の良さとかそういうものは人間の心に比例しません。

だから・・・どれだけ工藤君が天才でも死体に抱く感情が僕達以上に麻痺してるとは
思えないんです」

自分達があ的那天的な頭脳を誇る探偵に勝るのは死体検分の数。
つまりそれは人間としての何かが麻痺している度合の差。

その差を年齢が10ほど離れている工藤新一と無いわけがない。

「僕達以上なら・・・それはもう人ではなくなってしまうっている」

「・・・そうね」

恐らく彼は工藤新一にもっとこどもであってほしいのだろう。

事件現場と一緒に考えることを歓迎しながら、同時にそれではないけないと思っている。

工藤はなぜか捜査一課の中では最も高木を信頼しているらしく、
親しげに自ら話しかけることもよくあった。

そして佐藤と高木の仲をさりげなく応援もしてくれていた。
大阪から上京してきた彼の友人であり探偵でもある青年は
それをいつも面白そうに見ているのだ。

その大阪の青年曰く、

「あの刑事さんにはものごつつ恩を感じてとんねん、アイツ」

これは内緒やで、と佐藤はこっそり教えてもらったことがある。
よくわからなかったが工藤が高木をだいぶ気に入っていることは確かだ。

だからこそ、こどもにあるべき姿を望んでいるのかもしれない。

「でも私達だって死体見てショックを受けた時、みんなの前でうろたえないように努力したでしょ？だから工藤君ももしかしたら人知れず何かを感じているかもしれない。彼、元々本心を見せたがらない子だし」

高木には本心を見せてたようにも思えるが。
しかし工藤本人にその自覚はないだろう。

「それに・・・きっと彼は大丈夫よ。あなたがいる限り彼はこどもでいられるわ」
「え？」

隣の男と接している時、現場で「探偵」の顔をしている彼の顔が一瞬素に戻る。

あの表情こそが工藤新一の本当の心。

それだけははっきりと言える真実。

「あなたは優しいもの。だから彼は大丈夫よ」

話の真意が読めず、高木は戸惑った表情をこちらに向けた。警視庁でも、現場でも、いつも見せている困ったような顔だ。佐藤が一番大好きな表情の一つでもある。

「なんか・・・よくわからないですけど、佐藤さんが言うのなら大丈夫ですよ。うん」

佐藤さんが、という言葉にちよつと照れながらふつと笑い

「それでよろしい」と少し声を引き締めて言った。

どれだけ感覚が麻痺しようが彼の優しさやある一種の純粹さは消えることが無い。

工藤のみならず、それが佐藤の心も癒している。

彼女は赤信号を目の前にしてブレーキを踏んだ。

そしてゆつくりと動くウィンカー越しに垣間見える通行者の横断を眺める。

高木の問いに「いいえ」と答えた若き探偵。

彼も自分達と同様どこかで今日の死体を思い出しているだろうか。何も感じないとは彼女自身も思いたくなかった。

シグナルが碧に変わる。

佐藤はアクセルを踏みこんだ。

2人はそのまま着くまで無言だった。

ある機会に聞いたことがある。

彼の相棒でもある大阪の青年は高校生の時猟奇殺人に巻き込まれたと。

工藤新一よりも一足先に”ああいう死体”を見た彼はその時どう思っただろう。

やはり工藤と同じくいつもどおり事件を解決したのは想像できた。

それでも、工藤もその相棒もまだ「こどもたち」なのだ。

高木同様彼女もそう願いたかった。

三、夢をみる少年（前書き）

前話と同じく少々付け足しをしています。

三、夢をみる少年

赤子がこちらを向いていた。

死んでるのだから目が合ったのは偶然だ。

でも、それでも、赤子は自分を見ているように思えて仕方なかった。

ホテルで起こった殺人事件を解決した後、新一は徒歩で割かし近い自宅に向かった。

辺りはもう既に真っ暗である。

時計を見ると8時過ぎ。

どつりでおなかが空くわけだと新一は思った。

ちなみにホテルと一緒に昼食をとっていた蘭は捜査中に「遅くな

るから」と
夕方頃帰してある。

帰宅に関しては、「送って行くよ」と高木からの申し出はあった。
しかしそれは丁重に断り徒歩を選んだ。
見るからに彼は疲労が重なっているようだったので己よりも
早く休んでほしかったこともある。
だがそれとは別に1人になりたいという理由もあった。

はつきりとした根拠は無い。
ただ、人としやべりたくなかった。

やはり今日の事件のせいだろうか。

人通りの無い道の街灯をぼんやりと見つめながら歩く。

事件の被害者である妊婦の死体は流石に驚いた。
第一発見者のホテルマンが部屋の前で腰を抜かして口をパクパク
させているのを見て

「ああ、また死体があるんだな」とは予想したが、まさか妊婦の腹
の中から赤子が
飛び出して死んでいるとは思はなかった。

赤に染まったホテルの一室。

ドアを開けた瞬間目が合った赤子。

普通生まれて間もない赤子は瞳がまだ開ききってないはずなのに、その子は目が見開いていた。

開かないはずのその目に心を刺された気がした。

一瞬で体内の血が逆流するかのような熱さを感じて。

しかしその2人の死体に気持ち悪さは感じなかった。
いつも事件の時のような感情しかなかった。

被害者への哀れみと犯罪に対する怒りの感情。

それしかない。

それ以外に一体何を感じるというのだ。

死体に対する恐怖？

それとも同情？

そんな今更なこと、と頭を振る。

では今道を歩く自分にある、このなんともいえない

もやもやとしたものは何なのだろう。

死体を見たときからずっと心の中に不透明なものが棲んでいる。

だから蘭を先に帰したのだ。

彼女をあゝの死体のあるホテルにいさせたくなかった。

そうこう考えてるうちに大きな自宅の前に辿り着く。

窓から明かりが漏れている。

蘭がいるのだろうかと思いつながら扉を開いた。

合鍵は彼女にしか渡していないからである。

しかし、その予想はドアを開けたとき間違っていたことが知らされた。

「おう、工藤。邪魔させてもらってんでー」

今まで張っていた肩の力が一気にがくんと抜ける。

「彼」はリビングでテレビを見ながら菓子をほおばっていた。

ソファにどっかり座りそれはもうこの家の主かの如く。

想定外の状況に眉間辺りを押さえながらも叫んだ。

「なんでお前がいるんだよ服部!!」

びしっ指を差す。

そう、ソファにいたのは自分の友人。

「なんでって・・・お前が俺の講義ノート返さへんからやろ？明日その講義やねん。
やからはよ返せ」

「そうじゃなくって、なんでお前が俺の家に入れてるんだよ！？」
「あーこの家にきたら留守やったし、蘭ちゃんちに行つて鍵貸してもらた」

合鍵はあの子しか持つてへんしなー、と意味ありげなに笑う。
新一の幼馴染への呼び方を彼が「姉ちゃん」から「蘭ちゃん」に変えたのは
コナンが居なくなつてから。

つまりコナンから新一に戻つた時あたりからさりげなく変えたのだ。

以前理由を聞いたが、「お前が元に戻つたんやし、もう俺も姉ちゃんなんて言う

必要ないやろ」というよくわからない答えが返つてきている。

どうやらコナンでいる時、彼女を名前呼び出来なかつた新一に対して

気を使つていたらしい。

ソファに座るそんな平次は大学入学を期に上京していた。

もちろん新一と同じ大学である。

この家から数分のところにあるマンションに一人暮らししている。

「それに携帯に電話したけど、お前電源切つてたやろ？事件で聞いたから俺んちまで
持つて来さすのも悪い思て、わざわざこつち来て待つてあげたんやないか」

「ああ、そういえば切ってたな……。刑法のノートだったのか？
悪かった。今持ってくる」

この場合、どうやら非があるのは自分のようだ。

素直に謝って自室にノートを取りに行く。

ノートを借りたのはその講義のある日に事件があったからだ。

それで同じものを受けていた彼にノートを貸してもらったのだが、
この一週間忙しかったのですっかり返すのを忘れていた。

部屋に取りに行つてリビングに戻ってくると平次の見ていたテレビでは

記者がとある建物の前から中継をしていた。

新一が解決した事件の速報だった。

ホテルで妊婦が殺されたこと、その後しばらくして若い男が
逮捕されたこと、事件の大まかなあらすじが報道されている。

流石に、遺体の状況については詳しく記者は言っていないようだ。
工藤新一が解決したということも現段階では伏せられている。

今回の事件に何かしら思うところがあった自分が目暮にさりげなく
頼んだからだ。

しかし、数日後に発行される週刊誌には自分のことはともかく、
遺体や被害者と犯人の関係などは事細かく記されることになるだろう。

被害者の妊婦と犯人の男が進行形で付き合っていたという事実は
週刊誌の格好のネタになる。

その上被害者がお腹に宿らせた子供は犯人の男との間に出来たも

のではないのだ。

犯人と付き合う前に交際していた別の男が相手だった。それを正直に被害者は犯人に話した。

「あなたとの子供じゃないけれど、あなたと一緒に育てたい」と。

だが愛するが故の告白を男は無残にも切り捨てたのである。

「犯人はあなたです」と新一が男に向かって告げた時

彼は嫌な笑みを浮かべていた。

「あいつが別の男と作った子供を生かせることが許せなかった」という

男の動機は新一にとって不可解なものだった。

愛する女性の子供を、男は何故愛せなかったのだろうか。

そんなことを考えながら黙って背後でテレビを見つめる新一に気付いた平次が

せんべいを持った手で画面を指した。

「これやる？お前が今日解決した事件」

「ああ」

「なんや、後味悪そうな事件やったんやなあ」

世も末やわ、と言いながらせんべいをぱり、と口に入れた。

「工藤も座ってなんか食べえや」と陣取っていたソファの真ん中を譲る。

机の上にはどこから探し出したのか、せんべいのほかにも色々な菓子が置いてあった。

そして慣れた手つきで急須からお茶をコップに注いで彼に差し出す。

「お茶はもらうけど、お菓子は遠慮しとく。夕飯まだだしなんか作ってくる」

「さよか」

ノートと交換で差し出されたコップを手に取りそのまま冷蔵庫に向かう。

確か昨日蘭が来た時作ってくれた煮物が残っていたはずだ。それを見つけてレンジに入れた。ボタンを押すとゆっくりお皿がまわり始めた。

待つてる間することもないので、もらったお茶を飲みながらキッチンから

テレビを一緒に見る。

平次は黙ったままだ。

いつもの彼なら事件のあらましやトリックを興味津々で聞いてくる。

しかし今日は何も聞いてこない。

ただ自分が解決した事件が確認しただけ。

もしかして、彼もこの事件の詳細を知っているのかもしれない。聞く手段ならいくらでもある。

自分が高木とよく話すのと同様に彼も佐藤とよく話す。

それはもちろん妖しいものではなく、ただ単に馬が合うらしい。今日の事件のことも自分がいつ帰ってこれるか知るために連絡したとも想像できた。

テレビの音しか聞こえてこないキッチンで再び自分の中のもやもやとしたものが

思い出さされる。

帰路で考えてた出口の見えない謎は解決できてない。

だが。

この男に話したら何かわかるかもしれない。
そう新一は思考えた。

「今日の事件・・・」

思ったより喉が渴いてて声がかすれる。

「内容やトリック自体はいつもの事件とそう変わりはないが、何か特別な事情があったわけでもねえ」

平次は黙って画面を見つめている。
それに気にすることなく話を続ける。

「でも何かが違う」

手の中のお茶に視線を下ろす。

「その何かがわからねえ。ただ心のどこかに何かがある感じがするんだ。」

恐怖とか、そんなんじゃないくて」

今回の事件はただいつもより殺し方が残酷だっただけ。

それに対して恐怖がなかったというのは虚栄でもなんでもない。本当のことだ。

「常軌を逸した殺人だったからショックを受けた、っていうのも何か違うと思う。はつきりとは言えねえけど」

そこまで新一が言った後、平次が持っていたコップを机の上においた。

そして問いかけてくる。

「お前、その違和感が嫌なんか？」

新一は視線を彼に戻す。

「違和感は誰でも嫌だろ。それに、事件に対して心が乱れるのは探偵としてよくない」

よくわからないものが心の中にあるのは、決断の時妨げになる。だからこそこの違和感の正体を知りたいのだ。

しかし、次に同じ探偵である平次が言った言葉はその考えを否定するものだった。

少しの間黙っていた分、自分の考えをまとめて述べる。

「・・・別に、たまには迷ってもええんとちゃうか。何の迷いも乱れも無い人間は人間やない。探偵失格するより人間失格したほうがええなんてことはない。」

殺され方が残酷やつたらなんぼでも同情したらええ。

同情しても解決できたらええねん、俺等は。刑事でも猟奇殺人に対して何も感じひんなんてことはないんやし、工藤が言う何かはあっても悪ないと思うで」

思わずはっとした。

なぜなら彼は、15歳の時に今回の事件に匹敵する猟奇殺人に巻き込まれたから。

「俺はな、あの時からずっと「あるもん」が消えへんねん」「あるもの?」

「色んな死体の夢」

新一は目を見開く。

「お前等を初めて大阪に呼んだとき言つたやろ？工藤が刺されて死ぬ夢見た、て」

「・・・ああ」

「あれ、お前だけとちゃうねん」

初めて聞く事実に関心する。

「府警の人の時もあれば学校の友達の時もある。おかんやおとんの時かてある。」

ふと思ひ出した頃にそんな夢を見るねん」

彼は淡々と述べていった。

何気無いいつもの会話のように。

新一の立っている場所からはその表情は窺い知れなかったが、さほどいつもと変わらないのではないかと感じた。

「色んな人が死ぬ夢見たけど、1人だけまだ見てへん奴がある」

「・・・あの子か」

両親を除けば大体予想はつく。

「そや。この4年間まだ見たこと無い。でもいつかあいつが夢に出てきたら、
その時点で俺の中で何かが終わるんやと思う」

何が終わるのだとは聞けない。

「俺はどうしても和葉が死ぬ夢だけは見たらあかんねん」

平次が持っているコップに力を入れたのが見えた。

悲痛にも聞こえる彼の言葉はあまりにも重い。

しかし、彼女がいる限り彼はその夢だけは見ないのではないかと
新一は思う。

和葉がいれば平次は決して終わらない。

では自分も蘭がいれば大丈夫なのだろうか。

たとえ正体不明な違和感があったとしても。

そんな新一の内心に気づいているのか否か、彼は言葉を続ける。

「工藤はその違和感を消したらあかんで。その違和感が消えた時、お前も俺と同じになる」

見えない境界線がそこにあるのだ。

「お前は絶対”こっち”にきたらあかん」

そこで話を止め、彼は再び菓子に手をつけ始めた。

この話はこれで御仕舞いということだろう。

ちょうどその時レンジのタイマーが鳴ったので新一も自分の夕飯に取り掛かった。

緊迫したレポーターの声からバラエティーの笑い声に変わったのを聞いて

彼がチャンネルを変えたのが背後でわかる。

そして、しばらくしてから平次は泊まっていくなという彼の申し出を断わり帰宅した。

いつものように会話は弾まなかったせいもあるかもしれない。

その日から、新一も時々ある夢を見るようになった。

成人した自分と幼馴染。

幸せそうに彼女は赤子を抱いている。

自分達の子供だ。

とてもとても幸福な光景。

その絵に描いたような未来に頬を緩め、新一も子供の顔を見る。

そこにあつたのはあのホテルで目が合った血だらけの赤子。

そこで夢は覚め、現実に戻った自分は呆然と天井を見詰めるのだ。
悪夢を見たかのように汗を掻くわけでもなく鼓動が早くなるわけでもない。

ただ今見た夢を認識するように上をずっと見つめる。

赤子の引きつった死に顔が、頭から離れない。

平次の言う”こちら”に行くこともないが、蘭のいる”あちら”
にも
戻れないかもしれない。
新一はそう思った。

四、恍惚の手紙

また来た。

彼女はため息を一つついた。

学校から帰宅し郵便受けを覗くと、夕刊と共に入っている白い手紙。

父は帰宅してもそのまま素通りするので郵便受けを見るのは専ら彼女の役目だ。

何を書いてあるのかわかっていても、半ば義務的な感じで裏を返して宛名を見る。

「毛利蘭様」。

自分宛に届いたそれは開けなくてもどんな内容かは大体予想はつく。

週に一度同じ手紙が届くのだから。

毎週毎週、真っ白な封筒が郵便受けに入っていた。

困らないといえば嘘になる。

父に言えば警察を伝って手紙の郵送を止めることは出来るだろうが、

その気にはならなかった。

ただ定期的に届くその手紙を読んだ。

差出人は父がかつて依頼を受け解決した殺人事件の加害者だった。

実際はコナンの姿をした幼馴染が裏で真実へと導いたことは2年前にわかっている。

しかし表向きは自分の父が解決した事件だ。手錠がかけられるところまで、彼女はコナンと共に眺めていたのを今でもはつきりと覚えている。

まだ彼は公判中だが殺害した人数を考慮すれば、死刑が下される可能性が非常に高い。

自室に入るとその封を切った。ばらりと一枚しか無い便箋を開く。

悪いのはあちらの方とはいえ、逮捕された原因を作った彼女の父のことは一切触れられていない。

手紙には淡々と拘置所での生活が綴られているだけだ。最近寒くなってきましたなど、小窓から見える空が雲ばかりでつまらないなど。

馴れ馴れしい文体ではないが棘のある感じでもなかった。そして丁寧語でもない。敬語だった。

年下である彼女に対してその男はなぜか敬語で手紙を書いていた。彼と特別接点があったとはお世辞にも言えないだろう。しかしパトカーに乗せられる時ほんの少しだけつながりができた。彼が素直に連行されていると、ポケットからペンが一本落ちたのだ。

それを偶然側にいた彼女が拾って渡した。

ただ、それだけのこと。

しかし渡す瞬間目が合った彼の表情は驚いているようで、自然に拾ってくれた彼女に対して何を思ったのかはわからない。この手紙を読む限り関心を持ったことは確かなようだが。

毎週郵便受けから取り出し、封を切る。
そして読む。

この行為が彼をどんな気持ちにさせるのかは皆目検討がつかないが、
いずれ死ぬ人間の手紙を読むことは彼女に一つの疑問を抱かせた。

なぜこの手紙を自分だけのものになっているのだろう、と。

原因となった事件を解決した幼馴染にもまだ言っていないし、
父にも言うつもりは無い。

誰にも言わないまま彼女はひたすら男の手紙を読み続けるのだ。

意味の無い行為に蘭自身首をかしげると、手紙と共に入っていた
夕刊が目止まる。

帰宅してから居間にはまだ行ってなかったため自室にそのまま

持ってきていたそれを、手紙と引き換えに何気なく手に取った。
そこにはつい最近幼馴染が解決した妊婦殺害事件の続報が載っている。

余談だがあの事件の数日後、彼はそれとなく自分に大学卒業後の進路について聞いてきた。

来年はもう20歳である。

ここまで一緒にいれば流石に「結婚」という2文字も浮かび上がるが、

それについて彼が言及してくるのは初めてで。

彼の問いに対して心が高鳴ったのと同時に、突然の変化を不思議に思ったのも事実だ。

いつかわかるだろうと思い、彼女は気付かない振りをし続けているが。

次に新聞を見る目はそのまま左下の割かし大きくスペースの取られた見出しへと移る。

「2年前の大阪連続殺人事件の元刑事・坂田死刑囚の刑が執行」

蘭にも覚えがある事件の終末であった。

間接的に関係する事件が2つも同じ夕刊の一面に載るといっ

一般人にはありえない偶然に少しだけ苦笑する。

そういえばこの死刑囚に大阪の友人2人が会いに行ったというのを聞いたことがある。

死刑囚に面会した彼らと、死刑判決が下る男の手紙を読む自分。状況はよく似ているようでその中身は全然違うように思えた。

大阪の友人や自分の幼馴染は好きでそのような状況になったわけではない。

簡単に言えば、巻き込まれたとでも言うべきか。

知り合いの元刑事が殺人犯だったり、偶然遭った事件の被害者が妊婦だったり。

それはあまりにも哀しい災難なのだ。

しかし自分は違う。

止めようと思えば止められるはずの手紙を自らの意思で読み続けていた。

拘留所から送られるそれを誰にも言わずずっと独り占めしている。

夕刊を机に置き、再び白い便箋を手取る。

死刑判決の下る男の手紙を手中にして蘭は自分の気持ちがよくわからなかった。

五、背を這う蟲

ふつと瞼を開けると自分の部屋ではない天井が目の前に広がっていた。

しかし見慣れてないわけではない。

深夜の暗闇でもわかる真っ白な部屋は和葉を安心させる。

意外と几帳面な幼馴染、いや恋人の部屋はいつも片付いており今もベッドに入っただけのまま視線だけをぐるりと一周させると整然とした家具しかない。

彼女はいつも朝までぐっすり眠るほうなのだが、今日は何故か心がざわつく感じを

覚えて珍しく起きてしまった。

何時だろうと片手で携帯のディスプレイを覆いながら見る。

午前三時。

あと数時間は寝れると判断して携帯を裏向けにして側に置いた。

覆ったのは、光で隣に眠る男を起こさないためだ。

彼女の恋人は高校時代から非常に眠りが浅い。

今は安らかに眠っているが、時々すごく苦しそうな顔をしていることがある。

彼の夢見が悪いのはそれでわかった。

これは大学に入って一人暮らしをするようになってから知ったことなのだが。

和葉は週に1回彼のマンションへ来ていた。

そして彼も週に1回彼女のマンションへ来ていた。

大学が違うとはいえ恋人達の逢瀬にしては少ない回数かもしれない。

いが

それで2人は満足していた。

メールもするし、電話もするのだ。

週に2回しか会えない事で狂ってしまっただけ彼女達は依存し合っていない。

お互いを尊重し合い支え合う関係。

そんな理想を抱いているが果たしてどこまで現在出来ているか。

未成年の自分達には少し高すぎる理想かなと思いつつながら和葉はゆっくりと体を起こした。

どうやら完全に目が覚めてしまったようだ。

そして隣で眠る恋人の顔を見下ろす。

ちゃんと眠れているかを確認するために。

真っ黒な髪に焼けた肌色。

闇の中でもわかる綺麗な顔立ち。

男に綺麗という単語も変な感じだが、それでも美しいと思った。外見だけでなく内面も。

彼は彼女の周りにはいる同年代の中で、ある意味一番大人で一番子供なのである。

相棒ともいえる東の名探偵よりも人の心を知っていたし、かと思えば時にその東のより純粹すぎるほど子供でもあった。

とてもアンバランスな心。

だけど、自分はそうはいかない。

和葉は自身の心の内を悟る。

今日起きてしまったのはそのせいかもしれないと気付いた。

彼のようにいつまでも真っ直ぐでいることは出来ないのだ。

年を重ねるにつれ自分の力ではどうしようもない何か打ち寄せ
てくる。

目に見えるものではないが、なんとなくそれがわかった。

言うなれば、背を這う蟲のようなもの。

背中にいるので自分の目で見ることは不可能だ。

しかし這う動きでその存在を知ることができる。

ぞろりぞろりと蠢く蟲を。

違和感を覚えざるを得ないが、後ろにいる蟲を殺すことは出来な
いのだ。

恐らく蟲が這っているのは自分だけではないだろう。

新一にも。

あの蘭にも。

数時間前メールで蘭と少しの間だけやり取りをした。

蘭から話題を振られたのだが、どうやら新一との仲がここへ来てやっと

変化してきたらしい。

なんだかんだで恋心を自覚した途端猛スピードで進展した和葉達とは違い、

蘭と新一はゆっくりゆっくりとその距離を縮めてきた。

それが遂に変わる。

新一にどんな心境の変化があつたのかは聞いてないが、

大体の予想はつくような気がした。

恐らく彼の中で「引き金」が引かれたのだろう。

今までの価値観を根底から覆すほどの何かがあつたのだ。

それによつて今までの精神の構造を少しばかり変える引き金が引かれた。

相手の蘭よりも新一の変化を理解するとは皮肉なものだ。

いや、近すぎたからこそ蘭はわからなかったのかも知れないが。

和葉は見下ろしていた恋人の顔から目線を戻し、

今度は側の窓を見上げた。

無機質な月の光が部屋へ差し込み彼女や隣の男の寝顔を照らし出す。

そのまま月光はベッドサイドにあつた昨日の夕刊にも当たつた。

明日捨てる新聞紙の束の偶然一番上に積まれたのだろう。

一見普通の新聞紙だが、昨日の夕刊の見出しが何か知っている

和葉は少しだけ眉を顰めた。

連続殺人を起こした顔馴染みの刑事が昨夜死んだ。

それに関して自分の恋人はまだ何も言っていない。
別に強がっているわけでもなさそうだ。

その死刑執行を、淡々と事実として認識している。

この辺は彼を割り切ることの出来る大人だと思ったりもするのだが、

ついさっきまで自分を見ていた彼の目が子供のように真っ直ぐだったのを

思い出すとよくわからなくなってしまふ。

昔からずっとそうだ。

アンバランスな心のまま彼はずっと変わらない。

誰よりも美しく誰よりも汚れていて。

逆にそれは一種の芸術とでも言うべきか。

自分とはまた違う世界に彼は生きている。

そこまで考えて、もう一度視線を彼に戻して彼女はポツリと呟いた。

「なあ平次。あんたはずっとそのままなん？あたしはどんどん変わってしまうんやで？」

人は皆、その心に蟲を飼っている。
背を這い蠢く蟲を。

それが頂点まで伝った時人は変わる。

子供のままではいられない。

抗うことを許されない時の流れに身を任せるしかないのだ。

——彼一人を除いて。

それでもずっと側に居たい。

心に強く願うと和葉は再び毛布の中に体を入れる。
すると彼が無意識に彼女を抱き寄せた。

その温かさに浸りながら彼女はゆっくりと目を閉じた。

後書き

短い連載でしたが、ご愛読ありがとうございました。
短時間で書いたので、明日以降手直しが度々加わる可能性が大です；

特に5話目が・・・！

とりあえず1話ごとの後書きを手短に書きたいと思います。
毎度毎度後書きを別話で書いてすみません。

一、白の妙（優作＋有希子）

これはプロローグ的な話。

「こどもたち」から始めるより、親世代から始めたほうがなんとなく重みが

出るかなと思いましたが。

ちなみにタイトルの「妙」は不思議さとか奇妙さとかそういう意味です。

二、こどもたち（高木＋佐藤）

これは高佐による新一たちへの思い。

実はこの連載の中で一番精神が普通でないのは彼らです。

死体見てもぜんぜん大丈夫。新一たちよりタフです。

哀しいことですが、刑事だしある意味当たり前のことかなと。

三、夢をみる少年（新一）

私のストッパー解除状態で書いたホラー系。ごめんなさい・・・

（汗）

短編で出した時は「怖すぎる」という意見がチラホラあったのでこの連載で少しだけフォローしておきました。

四、恍惚の手紙（蘭）

実は一番エロスがある話。（爆）どんな風にエロスなのかはタイトル「恍惚の手紙」と照らし合わせて考えてみてください。

暗黙の了解のごとく蘭は「マリア様」的存在なのですが、それを根本から変えてみた問題作・・・かもしれません。

五、背を這う蟲（和葉）

通常小説の限界に挑戦。（ノクターン寸前？）ご、ごめんなさ・・・っ！

直接描写は無いですが、ちょっとドキリとするような雰囲気を目指してみました。・・・どうでしょうか？

平次の単品での話が無いのは「カウントダウン」で三話ほど使って彼の

心理描写をしたからです。（笑）

十分すぎるほど彼は描いてます。鼻屑ですね、鼻屑。（こら）だからこのシリーズではわざと出ませんでした。

あとこっというシリアスと怖さの混じる話が一番書きやすいです。評価欄にも「題名が特徴的」というような感じで言ってくださった方もいて

嬉しかったのですが、私自身今回はタイトルにもこだわって見たつもりです。

和風テイストにしてみました。

皆さんはどの話が一番気に入られたでしょうか？

今までの中で一番皆さんの反応が怖い作品かもしれません。

ナイーブな内容ですが、どんな風に感じ取られたのか非常に
気になるのでございます。

もし傷つかれたのであれば申し訳ないです。

本当に申し訳ありません。

一番伝えたかったのは、新一も蘭も、和葉もそして平次も「人間」
なんだよと。

頭脳や身体能力はずば抜けていても、どこか人間味があるに違
いないと

私自身が願って書きました。

完璧超人は人間として味が無いですから。

これはあくまでファンフィクションです。

ですので冗談半分に受け取ってくださいれば幸いです。

では、またいつかの作品でお会いできることを願って。

2007年1月9日

yoshina

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3559b/>

背を這う蟲

2010年12月8日02時19分発行